

《書評》

松本和也著『川上弘美を読む』

工藤 由布子 KUDO, YUKO

「川上弘美の小説を、それとして読むこと。

シンプルではあるけれど、こうした作業を着実に展開していくこと——それが本書における最大のねらいであり、課題である。」

本書の「はじめに」で、著者は、そう《決意表明》している。

いきなりの、その大胆さにまず驚いた。そして同時に、「はじめに」そんなことを言ってしまった、と、勝手に心配になってしまった。

著者の宣言は、一見決して突飛なものではない。その言葉のとおり、非常に「シンプル」で、文学研究に臨む姿勢として、極めてまっとうで、誠実である。おそらく多くの読者が好感を持ち、また期待するだろう。

けれども、実際にそのように作業を進めることは、おそろしく厄介で、困難であろうと予想された。当然のことながら、（一読者として小説を読む）ことと、（研究者として小説を論ずる）という行為の間には、予想以上の隔たりがある。その両者に対し、同時に、同じだけの誠実さを持つて向き合う、ということは、非常に消耗することだろう。

ましてや、ただでさえ困難なその研究対象は、多くの評論家や研究者

が、評価しつつも論じるのに難渋している、あの川上弘美なのだ。

しかし、そんな心配をよそに、著者は「いかに素朴にみえようとも、手がかりになるのは、具体的にここにある小説の言葉である」と書き、「川上弘美作品群の言葉を手がかりに、川上弘美の小説をそれとして読み、考え、書く（論じる）」という営為の、はじめの一步」として、本書を上梓したという。

著者は一体どのように、「川上弘美の小説を、それとして読む」ののだろうか。

著者の試みは、はたして成功するのだろうか。

本書では、第一章「神様」「草上の昼食」「神様2011」から第七章（『七夜物語』）まで、川上弘美の十作品が取り上げられている。

いずれの章も、冒頭でその作品の基本的概要、および、批評家・小説家・研究者等の評価が紹介・解説され、その後、著者自身の論が展開される、という構成なのだが、〈本題〉に入る前の紹介及び解説が、非常にわかりやすい、というのが第一印象である。そしてこの（わかりやすさ）

は、本書全体の大きな特徴の一つでもある。

これまでに発表されてきたいくつもの〈川上評〉が、かなり網羅されているのだが、情報過多、とは感じられない。その理由は、一つには、随所で引用される各〈川上評〉が、ごく自然な(適切な)文脈の中で登場していること、もう一つは、その〈川上評〉が、いつ頃、どのような流れの中でなされたものであるのが、可能な限り説明されていること、その内容の如何に関わらず、いずれも極力色をつけず、フラットに扱われているという点にあるだろう。

また、いわゆる〈文学の専門用語〉が、殆どと言っていいほど使われていない、という点も、わかりやすさに大いに貢献している。本書における著者の言葉遣いや文章は概して平易で、ごくたまに専門用語が用いられる場合は、まずそれが意味するものがわかりやすく説明される。更に、その論におけるその用語の重要性が、説得力を持つ形で論が展開されている。(第二章、「蛇を踏む」の、曾祖父のエピソードを巡る論において用いられる「紋中紋手法」などは、その好例だろう。)

更に、これらの〈わかりやすさ〉を支えている特徴は、本書の、読者に対する〈公平さ〉にも通じるものがある。著者は決して、自分だけが持っているカードを、〈奥の手〉として出すようなことはしない。本題に入るまでの過程で、必要なカードはその都度読者に配られ、共有されている。だからこそ著者は、知識や情報の多さではなく、専ら自らの〈論〉によつてのみ、読者に訴えなければならない。

さて、肝心の本論。

〈前置き〉では、あくまで中立的な立場から、説明・紹介・解説に徹していた著者だったが、その後の本論では熱く自論を展開している。

たとえば、第一章〈川上弘美の出発／現在〉。ここでは、川上弘美のデビュー作かつ代表作「神様」およびその続編「草上の昼食」、そして、二〇一一年の東北大地震直後に発表され話題を呼んだことでも記憶に新しい、自作の改作である「神様2011」を中心に、川上弘美作品におけるコミュニケーション論が展開される。

「神様」の、「わたし」と「くま」が、人間の親子連れとすれ違う場面の、何とも云い難い違和感を、「野次馬的な好奇心と、関わりになりにくくないという心理の二律背反」がクローズアップされた箇所」として、フランツ・ファノンの小説内の二グロ差別の描写と重ね合わせ、「露骨な差別の視線・言葉をも抱えこみ、その上で類を異にする他者同士のコミュニケーションの可否を問うた、その意味で実に問題含みの小説」だと指摘している。更に、「神様」と「神様2011」の比較においては、「神様2011」を、「現実世界がみない／みえないとして排除してきたものを、「わたし」を通じて目に見えるもの、ふれることのできるもの(「抱擁」として示し、しかも「わたし」が生きる日常の圏内に書きこんだ小説」として、『七夜物語』と並んで「#3・11」以降の現実には拮抗し得る虚構小説」と評価している。

またたとえば、第三章〈切ない純愛／新しい関係〉においては、ベストセラー小説『センセイの鞆』について、「異性愛主義という観点を補助線としながら」、作品に対する評価・反応を中心に分析している。

この作品が多くの一般読者——特に、川上弘美の主な読者層である女性だけでなく、中高年の男性にも支持された理由について、否定的な意見(たとえば、斎藤美奈子氏は、男性達が、自らをセンセイになぞらえて「男性に都合のよい物語」として(のみ)読んだ、としている)もあるが、はたして本当にそのような小説なのだろうか、と、著者は考える。

『センセイの靴』に対する最もポピュラーな讀辞である“せつない”は、主にその恋愛小説的要素に対してのものであることが多いが、この作品の主題は、実はもっと別なところにあるのではないかと、テキストを丹念に読み解いていく。

この章の新鮮なところは、〈文壇の反応〉〈批評家の反応〉〈一般読者の反応〉を、分け隔てなく扱い、参照・分析している点である。また、川上弘美本人の対談やインタビューの言葉もところどころに引用されており、『センセイの靴』を巡る周囲の反応や、それに対する川上の戸惑いや抵抗なども垣間見ることが出来る。

そして最終章「言葉の力、物語の力」。ここでは、(震災・原発事故に代表される)現実に対して、「物語」の無力さを痛感しつつも生み出された『七夜物語』について、その原動力となった『言葉の力』・『物語の力』とは一体何であるのか、等といった、「虚構/現実に関わる一連の問い」についての考察が展開されている。その途方もなくプリミティブで困難な問いに対しても、著者は、『七夜物語』のテキストに徹底的に目を凝らすことで、答えを探ろうと試みている。その中で、最終的に著者が最も注目したのは、主人公たちが(小説内の)「現実」から「物語」の世界に入り、再び「現実」世界に戻るることによって、自身も含めて(小説内の)「現実」が世界に変化が起きる、という『七夜物語』の構造と、それと同じような変化が、『七夜物語』の読者にも起こりうるのだ、という事が随所で暗示される、『七夜物語』の強いメッセージ性である。そして著者自身も、『言葉の力』・『物語の力』をその内/外で、過去から未来に向けて体現する小説、それこそが川上弘美『七夜物語』なのであり、それを読む者もまた、「物語」の幸福なサイクルに連なることができるだろう」と、『言葉の力』・『物語の力』に、希望を見出し、本書を結んで

いる。

冒頭で、「はじめに」の宣言に驚き、心配になった、と書いたが、それは全くの杞憂だった。本書は、混じり気なしに「川上弘美の小説を、それとして読み、考え、書く」ことに成功した、稀有な川上論であるように思う。本書はもちろん感想文や読書エッセイではなく『文学論』であり、川上弘美という作家の小説について研究した、その成果の一つである。しかし、それにも関わらず、読み終えた時、まるで川上弘美の小説を読んだかのような、不思議な感触が残るのだ。時に著者の視点のユニークさに驚き、論の運びの丁寧さや鮮やかさに感心しつつ読んだのだが、最も印象的なのは、著者と共に、川上弘美の小説世界をたつぷりと堪能した、ということなのだ。

そして、何といっても本書の最大の魅力は、読後、川上弘美の小説を読みたくなる、という点ではないだろうか。(分析)や、(批評)は出来ないけれど、シンプルに、丁寧に、もう一度川上弘美の小説を読み返したい。小説を、本を、読むということは本当に面白い。そう思い出させてくれるのだ。

『川上弘美を読む』看板に偽りなし、の、一冊である。

(二〇一三年三月一〇日 水声社 二八〇〇円)